

## 言葉のウラを吟味する

どんな言語にも、非論理的あるいはあいまいなところはあります。もちろん日本語についても例外ではありません。日本語をそのまま英語になおそうとするときに、そうした点があらわにされることがよくあります。

みなさんは、日本語が母国語であるために、かえってそうした非論理性やあいまいさに気づかないでいるのです。それに対して、外国語である英語に関しては、そういった点が少しでもあると気になるのは誰も経験があることでしょう。

したがって、日本語を英語になおすときは、まず原文を、その言葉のウラまでよく吟味して、非論理的なところやあいまいなところがあれば、それをより論理的で明確な日本語の文に言い換えてみるのが肝要です。

入試では、日本語の非論理性、あいまいさでワナにかけられる問題が多いのです。この章で学ぶテクニックを用いて、そうしたワナに落ちることを最小限に留めることができれば、点数は確実にかせげられるでしょう。

☹️ b) She has no difficulty in thinking abstractly, but it is unfortunate that she can hardly deal with non-abstract matters she meets on a daily basis.

☞ on a daily basis 「毎日...」

b) では「**実際的な**」に practical が浮ばない場合には non-abstract と逃げる手が使えることを示していますが、この部分が ☹️ に相当する理由です。

次のように、「**実際的な**」を down-to-earth という形容詞で表すこともできます。また、「**うまく処理できない**」は be good at ~ の反対の be poor at ~ で表すこともできます。前半の構文も変えた訳例にしてみます：

☹️ c) As an abstract thinker, she is good, however she is, sad to say, poor at dealing with more down-to-earth matters.

前半の「彼女は抽象的な思考者としては良い」はきわめて英語らしい表現でしょう。みなさんは次のような言い換えをよく知っていると思います。

彼女は英語を話すのが上手だ。

**She speaks English well.**

**She is a good speaker of English.**

ただし、「日常生活」が訳されていないために ☹️ になっています。こうした訳抜けは減点の対象になりますから、十分な注意が必要です。

次の例では、「**抽象的な**」「**実際的な**」に上の訳例以外の語、theoretical「理論上の、空論的な」、concrete「現実的な、具体的な」を使ってみました。これらは原文からはかなりズレていますが、何も書かないよりははるかにましです：

☹️ d) When it comes to theoretical thinking, she is good, but I have to say that when it comes to everyday, concrete matters, she is not good at handling them.

☞ when it comes to ~ 「～ということになると」

「**残念ながら**」を I have to say ... (= ...と言わざるをえない) と訳していますが、原文の基本的な意味合いは訳出されているでしょう。

なお、意味するところは同じでも、文法的に言えば、unfortunately, unfortunate は英語では否定、sad to say // have to say は肯定ということになります。こういった日本語と英語の「肯定—否定」表現との差異は面白いところです。

## ① 慎用的な使い方

## 基本例 (a)

- ▶ 1) 昨日6時ごろ電話があった。
  - ➔ There was a telephone call at about six yesterday.
- ▶ 2) 電話を使っていますか。
  - ➔ Can I use your telephone?

この二つの日本語は、みなさんがごく日常的に用いているふつうの日本語ですが、英訳された文では、「電話」が a telephone call (=電話をかけること) と a telephone (=電話機そのもの) とに訳し分けられています。日本語では、それぞれの ( ) の中の意味を文脈の中でほとんど無意識のうちにすばやく了解